

2011 年 5月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 31



紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 23

(聞き手 高橋素子)

高橋 > この度の、東北地方太平洋沖地震の余震は未だに続き、福島原発の高濃度の放射能漏れは、貴重な生命と文化、財産を失うことにもなりかねず、被害地の皆様のみならず、全国民を不安に陥れ、震え上がらせています。

会長 > 俳人としてこの現実をどう受けとめるのか。
俳人はしっかり俳句に記録しておかねばなりませんね。
放射性ヨウ素に穢され春の土
春天に充ち放射性微粒子よ
難民に届くボトルの春の水

高橋 > 確かにこれ程の未曾有の大災害を心に留め、将来に生かすためにも、俳句に記録して置く事は大切ですね。全国民一体となつての一日も早い復旧を祈りながら、本題に入らせて戴きます。
本日は前回に引き続き、「夏の詠物」の部からという事に。よろしく御指導の程お願い致します。

田家

六月や白をほさうそつき白を 鬼貫
田家(でんか)とは、田舎又田舎の家の事ですね。

開かんとするとき筆に似たり

己つぼみおのれ畫て蓮かな 素堂
確かに蓮の蕾は、筆の形に見えますね。

文覚

花けしの花の終の坊主かな 紅緑

文覚(もんがく)は、もと北面の武士。誤って袈裟御前を殺して出家し、熊野で苦行したという平安末期から鎌倉初期の真言宗の僧ですね。

江戸玉龍奇童八歳にてうせにし

三とせにあたりぬるを

其父なる人へ申遺す

わすれ草といふもの咲て中々に 大江丸

会長 > 「六月や…」、

六月は雨期ですね。最近は「臼」は餅搗きにしか使いませんが、かつては日常的に頻繁に使用したものです。霰が来ないように、晴れた日には干したのです。

「己つぼみ…」、

高橋さんのおっしゃる通り、 蕾は筆の穂先に似ています。

「花けしの…」、

芥子の花は、花びらが散ると坊主になる。つまり北面の武士は「芥子の花」、それが終いには坊主になったということですね。

「わすれ草…」、

わすれ草という花が咲いても中々忘れられないと、未練の気持を訴えているのです。

高橋 > 有難うございます。

次は「ほととぎす」の詠物が沢山挙げられていますよ。

時鳥はカッコウ科の夏鳥で、鶯などの巣に産卵して、仮親に托卵させるという変わった習性を持つ怠け者の鳥ですね。

「てっぺんかけたか」、「ほっちゃんかけたか」等と鳴き、あやなしどり、夜直鳥(よただどり)などの異名を持ち、古来、和歌などに多く詠まれていますね。

卯月の末三人を書たる

繒に賛所望

ほととぎす馬追船頭おちの人 鬼貫

おちの人は「御乳人」、貴人の子の乳母のことですね。

伏見西岸寺の地藏に詣侍りて

本尊に油かけたかほととぎす 意朔

鎮西八郎為朝礫うつ所に

時鳥蠅むしめらもよつく聞け 一茶

会長 > 「ほととぎす…」、

「ホトトギス」は喧しい声で鳴きます。馬追船頭お乳母は、人の弱みに付け込んで大きな声でねだる。この句はホトトギスをからかっています。

「本尊に…」、

昔から「ホトトギス」の啼き方を「てつぺんかけたか」と言いますね。あれを読み替えていたのです。「欠ける」を「掛ける」としたわけです。

「時鳥…」、

戦場では敵の軍勢に、「やあやあ、よく聞け」と呼びかけますね。一茶はホトトギスを擬人化して、蠅や虫けらに呼びかけている。ホトトギスの名乗りです。

高橋 > なるほど、面白いですね。

夏の詠物は、まだまだ蠅、蛭、げぢげぢと虫の句が続きますよ。

畫讚

この蠅によくよく盧生寝ぼう也 大江丸

畫讚とは画に添え書きされた詩・歌・文などのことですね。

題福祿壽

蠅を打つ我手短かき頭かな 紅緑

宇治

喜撰法師蛭の歌も詠れけり 素堂

「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」という百人一首の歌は有名ですが、喜撰法師に蛭の歌があるのでしょうか。

六歌仙のうち

げぢげぢを喜撰が袖にかくしけり 大江丸

会長 > 「この蠅に…」、
盧生は邯鄲の夢を見た人物です。作者の大江丸は、昼寝をしようにも蠅が顔を這い回るので夢を見るどころではない。ところが、盧生は、夢を見た。よくよく寝坊だったに違いないということです。

「蠅を打つ…」、
頭にとまった蠅を打つのですね。手を伸ばしたのでは打てないから、短くまげて撃つということです。

「喜撰法師…」、
喜撰法師の歌に、「このまよりみゆるは谷の蛸かも いさりにあまの海へゆくかも」があるそうですね。そのことを詠んだのでしょう。

「げぢげぢを…」、
歌をきれいに詠むのに「げじげじ」は邪魔ですから、袖に隠してしまったのです。もちろん大江丸のつくりごとですが。

高橋 > 成る程！作り事ですか。本当だったら大変な事に(笑)。次は、也有の句に進みます。
西行の柳陰に草鞋の紐
を結ぶ圖に
むすぶのを清水かと思れば草履かな 也有

布袋の畳に
けふぞとも臍はしらずや衣かへ 也有

会長 > 「むすぶのを…」、
駄洒落ですね。水を掬うことを「むすぶ」と言います。掌を握るようにして水を掬うからです。草履の紐も結びますね。

「けふぞとも…」、
臍を擬人化しています。衣がへをするのに衣服を脱いだところ、臍が丸見えになったの

です。臍出しの突然のことに驚いた。今日が衣がへとは知らなかった、ということです。

高橋 > 次々と面白い句が書かれていますよ。ご解説が楽しみです。

古着を買って

どこの誰が死からならん初袷 一茶

帰菴

笠の蠅われより先へかけ入りぬ 一茶

一書生の閑窓に書

学問は尻からぬけるほたる哉 蕪村

会長 > 「どこの誰が……」、

冬になると、単から袷になります。一茶は貧乏ですから古着を買った。何処の誰かは知らぬが、袷の持ち主は死んだのだらうと思ったのです。

「笠の蠅……」、

旅の宿に着いた途端に、笠の蠅が笠を離れて宿に飛び込んでいった。余程うまそうな匂いがしたのですね。

「学問は……」、

覚えてもすぐに忘れてしまう悲しさです。今も江戸時代もさして変わりません。

高橋 > 流石です。句に負けずご説明も面白いですね。

次に参りますね。続けてご説明下さいね。

夕涼

なんとけふの暑さはと石の塵を吹 鬼貫

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて来りけり 一茶

奥信濃に浴して

下々下々下々の下国の涼しさよ 一茶

- 会長 > なんとけふの……、
やせ我慢ですね。石は焼けているから、塵も熱風となって吹き飛ぶ。余計に暑い。
- 「涼風の……」、
裏部屋の突き当たりでは「涼風」も弱まっているが それでも有難いことです。曲がりくねってさぞ大変だったでしょうと、風にお愛想を言っている。
- 「下々下々下々の……」、
かつて朝廷が、諸国を国力により四等級に分けた。下国し下の方で、その下国に下々下々と強調して呼んでいるが、涼しさは上等だわいと威張っている。

- 高橋 > 楽しいご解説、百九年前の滑稽句の世界にご案内戴いている内に、終りのお時間になってしまいました。
最後に会長に、俳句をお願いして、締めさせて戴きたいと思います。

- 会長 > 川柳ですが、津波でひとつ。
引退時期を津波に浚はれ菅総理

原発で参ります。これは俳句です。
四月馬鹿安全神話鵜呑みにし

避難所で一句。
避難所の俳人携帯に花信待つ

東日本大震災で被災された皆様、ご関係者の皆様に、心よりお見舞いと、一日も早い復興をお祈り申し上げます。